

百年と一日

9

一年一組一番と二組一番は、長雨の夏に渡り廊下のそばの植え込みできのこを発見し、卒業して二年後に再会したあと、十年経って、二十年経って、まだ会えていない話

17

角のたばこ屋は藤に覆われていて毎年見事な花が咲いたが、よく見るとそれは二本の藤が絡まり合っていて、一つはある日家の前に置かれていたということを、今は誰も知らない

23

逃げて入り江にたどり着いた男は少年と老人に助けられ、戦争が終わってからもその集落に住み続けたが、ほとんど少年としか話さなかった

29

〈娘の話 1〉

31

駅のコンコースに噴水があったころ、男は一日中そこにいて、パークと呼ばれていて、知らない女にいきなり怒られた

大根の穫れない町で暮らす大根が好きなたたしは大根の栽培を試み、近所の人たちに大根料理をふるまうようになって、大根の物語を考えた

たまたま降りた駅で引越し先を決め、商店街の酒屋で働き、配達先の女と知り合い、女がいなくなつて引越し、別の町に住み着いた男の話

小さな駅の近くの小さな家の前で、学校をさぼつた中学生が三人、駅のほうを眺めていて、十年が経つた

〈ファミリートツリー 1〉

ラーメン屋「未来軒」は、長い間そこにあつて、その間に周囲の店がなくなつたり、マンションが建つたりして、人が去り、人がやつてきた

戦争が始まつた報せをラジオで知つた女のところに、親戚の女と子どもが避難してきていつしよに暮らし、戦争が終わつて街へ帰つていき、内戦が始まつた

埠頭からいくつも行き交っていた大型フェリーはすべて廃止になり、ターミナルは放置されて長い時間が経ったが、一人の裕福な投資家がリゾートホテルを建て、たくさんの人たちが宇宙へ行く新型航空機を眺めた

銭湯を営む家の男たちは皆「正」という漢字が名前につけられていてそれを誰がいつ決めたのか誰も知らなかった

〈娘の話 2〉

二人は毎月名画座に通い、映画館に行く前には必ず近くのラーメン屋でラーメンと餃子とチャーハンを食べ、あるとき映画の中に一人とそっくりな人物が映っているのを観た

二階の窓から土手が眺められた川は台風の影響で増水して決壊しそうになったが、その家のできたころにはあたりには田畑しかなく、もつと昔には人間も来なかった

「セカンドハンド」というストレートな名前の中古品店で、アビーは日本語の漫画と小説を見つければ、日本語が読める同級生に見せたら小説の最後のページにあるメモ書きはラブレターだと言われた

アパート一階の住人は暮らし始めて二年経って毎日同じ時間に路地を通る猫に気がつき、行く先を追ってみると、猫が入っていった空き家は、住人が引越して来た頃にはまだ空き家ではなかった

〈ファミリーツリー 2〉

水島は交通事故に遭い、しばらく入院していたが後遺症もなく、事故の記憶も薄れかけてきた七年後に出張先の東京で、事故を起こした車を運転していた横田を見かけた

商店街のメニュー図解を並べた古びた喫茶店は、店主が学生時代に通ったジャズ喫茶を理想として開店し、三十年近く営業して閉店した

兄弟は仲がいいと言われて育ち、兄は勉強をするために街を出て、弟はギターを弾き始めて有名になり、兄は居酒屋のテレビで弟を見た

屋上にある部屋を探して住んだ山本は、また別の屋上やバルコニーの広い部屋に移り住み、また別の部屋に移り、女がいたこともあったし、隣人と話したこともあった

〈娘の話 3〉

国際空港には出発を待つ女学生たちがいて、子供を連れた夫婦がいて、父親に見送られる娘がいて、国際空港になる前にもそこから飛行機で飛び立った男がいた

バスに乗って砂漠に行った姉は携帯が通じたので砂漠の写真を妹に送り、妹は以前訪れた砂漠のことを考えた

雪が積もらない町にある日大雪が降り続き、家を抜け出した子供は公園で黒い犬を見かけ、その直後に同級生から名前を呼ばれた

地下街にはたいてい噴水が数多くあり、その地下の噴水広場は待ち合わせ場所、何十年前も、数年後も、誰かが誰かを待っていた

〈ファミリートリー 3〉

近藤はテレビばかり見ていて、テレビで宇宙飛行士を見て宇宙飛行士になることにして、月へ行つた

初めて列車が走ったとき、祖母の祖父は羊を飼っていて、彼の妻は毛糸を紡いでいて、あ  
る日からようやく話をするようになった

雑居ビルの一階には小さな店がいくつも入っていて、いちばん奥でカフェを始めた女は占  
い師に輝かしい未来を予言された

解体する建物の奥に何十年も手つかずのままの部屋があり、そこに残されていた誰かの原  
稿を売りに行つたが金にはならなかった

装画 長谷川澹二郎「紙袋」  
装丁・本文設計 名久井直子



一年一組一番と二組一番は、長雨の夏に渡り廊下のそばの植え込みできのこを発見し、卒業して二年後に再会したあと、十年経って、二十年経って、まだ会えていない話

なにか見えたような気がして一年一組一番が植え込みに近づくと、そこには白くて丸いものがあった。

「忽然<sup>こつぜん</sup>」という言葉はこういうときに使うのだろう、と一組一番は思った。

ビニール傘には、大きな雨粒が当たってばらばらと音が鳴っていた。その音が、一組一番はとても好きだった。雑草が伸びた芝生には雨水が溜まって、湿原のように踏み込むたびに水が浸<sup>し</sup>み出た。

きのこは、真っ白だった。根元の地面は、芝生と落ち葉に赤茶色の土が跳ね、濁った水が溜まっているのに、まるく白い表面に砂粒一つついていないのは、奇妙だった。木陰だからか、水滴も、ついていない。誰かがきのこを持ってここに置いたのだろうか、と一組一番は考えた。そのほうが、腑に落ちる。

誰かに見つけてもらうために。

だとしたら、見つけた自分は、確かめなければならない。

一組一番は、周囲に誰もいないのを確認した。今日は大幅に遅刻していた。あと十分もすれば、二時間目が終わり、二十分の休み時間となる。一組一番の通うこの高校では、この二十分がホームルームに当てられていた。

植え込みは、体育館と旧館をつなぐ渡り廊下のそばだった。一組一番は、裏門から入り、体育館の裏を通ってきた。体育館からは、かけ声が聞こえてきた。球技の練習試合をやっているらしい。

一組一番は、立ち入り禁止の芝生に足を踏み入れた。土と葉が含んでいた水が浸みだし、デッキシューズが濡れた。雨水はキャンパス地をあつというまに透過して、足に冷たい感触が広がった。

しゃがんで見ると、白いきのこの先、植え込みの奥にもう一つ白いきのこを見つけた。その先に、さらにもう一つ。そっくり同じのが、だんだん小さくなり、その次のは、ツツジの葉の陰に隠れている。それを、一組一番は覗のぞこうとした。

「なにしてんのん」

急に声をかけられて、思わず肩がきゅつとなった。振り向くと、二組一番が立っていた。

二組一番も、まったく同じ透明のビニール傘を差して、そこで雨粒が音を立てている。雨はさらに強くなり、音も大きくなった。

一組一番は「青木洋子」で、二組一番は「浅井由子」だった。この高校では前年から出席簿が男女混合となり、二人とも「一番」に慣れないままだった。保育園も中学校も男女別、男子のあとに女子、という並びが、まるでこの世のルールであるかのように決まっていた。だからこの高校に入学して、それが単なる慣習に過ぎなかったとわかったのはよかったが、なにをするにもクラス中で真っ先に指名され、注目を浴びながらやらなければならぬという戸惑いはあった。そのことについて、二人は一度だけ体育の時間に話し合ったことがあった。

「きのこ」

一組は答えた。手前のもっとも大きなきのこを人差し指でまっすぐ指した。

「植えたん？」

二組は、眉根を寄せ、理解できない、という表情で聞いた。なぜそんなことをしたのか、と言いたげだった。

「ちやうちやう。生えてん」

「よかったー」

二組は、安堵のため息とともに、そう言った。

「昨日は、なんもなかった」

「そうやろ。すごいな」

雨は、もう二週間降り続けていた。寒い夏で、七月なのに台風も来た。

もう少し踏み込んで奥を覗くと、その先には、椎茸にそっくりな形をしたきのこが生えていた。しかし、大きさが違った。笠が三十センチもある。作りもののように完璧な形だ。やっぱり誰かが植えたのかもしれない。

そのとき、なにか青い小さなものが、二人の視界の隅を動いた。

小さな、生きものの？

一組と二組は、顔を見合わせた。

「なんか、おった？」

「走った？」

ばらばらばら、と雨は傘を叩いていた。リズムが変わった。こういう曲知ってる、なんやっただけ、と一組は思ったが、思い出せなかった。

予鈴が鳴り、一組と二組は慌ててそれぞれの教室へ戻った

二年生のときも三年生のときも、一組と二組は同じクラスにはならなかった。話をする

機会も、あんまりないまま卒業した。それぞれのクラスで、やっぱり二人とも出席番号は一番だった。

大学二年の夏、一組一番は、京都に行った。野外で行われるロックバンドのライブを見に行ったのだった。会場前の横断歩道は、人でごった返していた。流れ落ちる汗を拭いながら、いっしょに来た友人を見失わないように急いでいたら、名前を呼ばれた気がした。ちょうど渡りきったところで、立ち止まって振り返ると、二組一番が人波の中から顔を出した。

「なにしてんのん」

「ライブ、見に来てん」

「いっしょや」

「好きなんや」

「それでもないけど」

一組がそう言うと、二組は笑った。お互いの友人が、それぞれの名前を呼んだ。

「ほな、またねー！」

手を振って別れた。ライブ会場に入ってからは会わなかった。

三年経って、一組一番はつけっぱなしにしていたテレビで二組一番を見た。夜中にひっ

そり放送されているドキュメンタリー番組だった。瀬戸内海の離島を取材していた。昔は漁業で栄えたその島は過疎化で人口が減り、残った個性豊かな人々がイベントを企画したり飲食店を作ったりする様子を一年にわたって取材した、とのことだった。うどん屋の客の中に、二組一番がいた。夜になるとその店で、ギターを演奏していた。二組へのインタビュもあつた。高校を卒業したあとアルバイトを転々としていたが、半年前にその島にたどり着き、うどん屋を手伝っている。海辺の空き家を宿泊施設に改装し、翌月にオープンする予定だと話していた。二組一番は、浜辺でもギターを弾いて歌った。二組がギターを弾けるとは、一組は知らなかった。とてもいい歌だった。少ししか放送されないのが残念だった。

話してみたいと思つたが、連絡先を知らなかったし、共通の仲がいい友人もいなかったで、そのままになった。

一組一番は翌年、東京に移つて、不動産会社で働き始めた。映画の感想をブログに書いているうちに評判になり、雑誌やレビューサイトにもコラムを書くようになった。雑誌の仕事が始めてから四年後にはそこで知り合つた人に誘われて深夜ラジオで人生相談のコーナーを持つことになった。人生相談、と言っても、深刻なものより、ちょっとニツチな、人にわざわざ相談するのも気が引けるような悩みというのがテーマだったが、それなりに

人気はあつて、投稿も多かった。番組に寄せられたSNSのメッセージを読んでいると、そこにくつついている返信に、

「青木さん、すごいよね。実は同じ高校でした」

とあるのを見つけた。誰だろうと思つて、その返信を書いた人のアカウントをたどつていくと、それはどうやら二組一番らしかった。本名も書いていないが、アカウント名は二組がよく呼ばれていたあだ名だった。どこに住んでいるかはわからないが、少なくとも十年前にテレビで見た離島ではなかった。子供が二人いて、近くの大形ショッピングモールやテーマパークに遊びに行つたときの画像があがつていた。

メッセージを送ってみようかと思つたが、親子ともにもうまく顔部分を隠してあるその画像は、一組の知っている二組とは違つたイメージに思え、躊躇ちゆうちゆうした。二組も、一組や番組に直接メッセージを送つてくることはなかった。一組は二組に、どこかで会えるような気がしていた。夏の路上で呼び止められたあのときみたいに、いつか、どこかで。

その番組のコーナーは三年も続いた。ラジオをやめてから、一組はエッセイ集を三冊出版した。

後年、知人に頼まれて大学で講師をすることになった。最初の授業が終わつた後、学生の一人が話しかけてきた。とても色の白い子だった。

「母が、青木さんと同じ高校だって言っていました」

二組一番の長男だった。輪郭が似ていた。

「浅井さん、お元気？」

「今は、大連に住んでるんです。再婚した相手の転勤で」

彼は、スマートフォンを取り出して、画像を見せてくれた。港に停泊中の船を背景に、

二組はなぜか真っ赤なジャージの上下を着て立っていた。

「青木さんって、母といっしょに宇宙人見たんですよね？ 銀色のちっちゃいやつ」

二組の息子は、その話をとても聞きたそうだった。



逃げて入り江にたどり着いた男は少年と老人に助けられ、戦争が終わってからもその集落に住み続けたが、ほとんど少年としか話さなかった

戦争の終わりごろに、男は島に隠れた。対岸のさらに山の向こうから逃げてきた。

もうすぐ戦争が終わるとは、男は思っていなかった。誰も思っていなかった。少なくともまだまだ何年も続くと思っていた。だから男は逃げて、泳いで海を渡り、島に隠れた。泳ぐのだけは得意だった。

ひと月もしないうちに戦争は終わった。しばらく、男はそのことに気づかなかった。入り江の奥の山裾やますそ、木が生い茂った下の洞窟に潜んでいた。夏だったので、木も草も蔓つづも繁茂さかしていて、入り江の小さな集落からは見えなかった。

夜の闇が山も集落も覆ってしまうと、男は洞窟から出てきて、畑の野菜を盗んだり、磯で貝やたまには魚を獲ったりもした。盗んできた野菜を山の中で増やそうとしてみたりもしたがなかなかうまく行かなかった。木にぶら下がっている紫色の実を食べ、腹を壊した上に高熱が出たこともあった。固く冷たい岩の上で丸まり、このまま死ぬのか、と三日間

唸り続けた。戦場で死ぬのと、どっちがよかっただろう。ひどい傷を受けたり、爆弾で体がちぎれたり、そんなのよりはましだろうか。それとも、何人も殺すよりも。いや、それより前に、自分たちは戦場に出るまでもなく、泥の中を進み、実際に役に立つのかもわからない、自分には関係のないものを運ぶだけで、飢え死にしていたかもしれない。上官に暴行されたり、疫病にかかったり、それで死んでいくやつを何人も見てきた。それよりは、ましだろう。ここで誰にも気づかれずに死んで、数日のうちに野犬かなにかが死体を食べる。食べるほどの肉は残っていないし、とんでもなくまずいだろうから、動物にも見向きもされないかもしれない。

どれくらい時間が経ったのか男にはわからないが、目を開けると腹の痛みは治まっていた。熱もなかった。途方もなくだるい体を引きずって洞窟から這い出たが、力尽きてそこに転がっていた。しばらくして、誰かが近づいてきたのに気づいた。

十歳にはならない、瘦<sup>や</sup>せた少年だった。少年は男をじっと見下ろし、彼がほとんど動けない、つまり自分に危害を加えることはできないだろうと理解したところで、なにか言った。

男は、少年の言葉が、半分わかって、半分わからなかった。死ぬのか、まだ生きられそうなのか、と聞いているのはわかった。わからない、と男は答えた。正直に言えば、今、

自分がほんとうに生きているのか、あるいはもう死んでいるのかさえ、疑わしかった。とうに死んで、これは夢に似たなにかのような気がしていた。

少年は、まだしばらく男を眺め、それから足もとの小石を男に向かって軽く投げた。小石は腕の近くに落ちたが、男はそれにもなにも反応できなかった。少年は、なにも言わず、背中を向けて藪くさの向こうへ消えていった。

二日して、男はなんとか体を起こせるようになった。水だけを飲み、洞窟の壁にもたれていた。鳥が鳴く甲高い声だけが森に響いていたが、姿は見えなかった。鼠ねずみかなにか、小さな茶色い動くものが洞窟の前を横切ったが、それを捕まえることはできるはずもなく、ただぼんやりとその走っていった先に視線を向けていると、少年が現れた。そのうしろには、老人もいた。二人は近づいてきて、なにか言った。老人の言葉はまるきりわからなかった。男と同じぐらい痩せていて、髪も眉もなかった。

老人は、黄色っぽい団子のようなものを差し出した。男は口に詰め込んだが、味はしなかった。ただ粘ついた気持ち悪さだけが残った。

少年が、ついてこいというようなことをいい、男は力を振り絞って、山を下りた。集落の人たちが、遠巻きに男を眺めていた。

老人の家は、浜に近い、漁師小屋のような粗末な家で、土間には網や銚もりがあった。老人

の妻だろうか、老婆がそこに座っていた。老婆は、男と同じ言葉が話せた。それで、戦争が終わったことを知った。そして、その家の息子が死んだから代わりに働け、と言った。男は頷いた。それよりほかに、なにも思いつかなかった。

男も、海辺の町の出だったから、その生活には案外早く慣れた。明け方に小舟で海へ出て魚を獲り、昼間は山裾の狭い畑を耕した。集落の人たちは、男を攻撃するようなことはなかったが、話しかけてくることもなかった。いつも遠巻きに見えて、男が身を寄せている家にも近づく者はいなかった。

ときどき話すのは、最初に会った少年だけだった。少年は遠い町で両親が戦闘に巻き込まれて死に、この入り江の遠縁の家に住んでいた。少年は魚を獲るのが誰よりもうまかった。海に潜り、大きな魚も銛で仕留めることができた。そして、その魚をときどき男にも分けてくれた。

少年は中学を出て、入り江を離れた。面倒を見てくれた遠縁の家族にも入り江の人たちにも、ずっと馴染めないままだった。少年が入り江を出る日、男は峠を越えて、隣の入り江の港まで少年を見送りに行った。少年は、ありがとう、と言った。男も、同じ言葉を返した。やってきた船には、少年と同じような年頃の子供たちが十人乗っていた。

しばらくして、男を助けた老人が死んだ。入り江でいちばんの年寄りだったことを、男

はその時に知った。男は、歩けなくなつた老婆の世話もするようになった。老婆は、男の故郷に近いところで生まれたのだと話した。五歳のときに母親に連れられてそこを出て以来、一度も戻っていない。戻るなと母親に言われていた、と言う。母親とは老婆が十歳のときに生き別れ、そのあとしばらくしてこの入り江に來た。もしおまえが故郷に返ることがあつたら、あの町に行つてみてほしい、と老婆は言つた。

老婆が死んだあと、男は住んでいた家を焼き払い、自分で作つた船で海を渡つた。あの夏に泳ぎ着いて以来、初めて島を離れた。

対岸の半島は、ずいぶん様子が変わつていた。港に大きな工場ができ、新しく架けられた橋を大型車が行き交つていた。男はひたすら歩き、一週間歩いて、大きな街にたどり着いた。日雇いの仕事を転々とし、そこで十年暮らした。やっとわずかな金を貯め、また港へ出て、故郷へ向かう大型船に乗つた。船が離れていくとき、岸壁に見送りに來ている大勢の中に誰か知つた人がいるような気がした。誰もいるはずがないのに、小さくなつていくたくさんの顔を眺めていた。

男が向かつたのは、自分の故郷の海辺ではなく、老婆が生まれたという谷間の小さな町だつた。老婆に聞いたとおりに、中心部を流れる川かわづた伝いに段々畑の斜面を上つていくと、家はなかつたが、大きな木があつた。老婆が言つたとおりの形だと思つた。男はその根元

に座り、畑の向こうの町を長い間眺めていた。通りかかった近所の夫婦がその姿を目に留めた。

少年が一度だけ入り江に戻ったのは、男に見送られて島を出てから三十年も経ったあとだった。入り江はかなり人が減り、廃屋はひやがあちこちにあった。そこにいるのは年老いた人だけだった。少年を置いてくれた遠縁も、すでに入り江を離れていた。

彼は浜までおりていき、男が住んでいた家を探したがなんの痕跡もなかった。波の音に振り返ると、海は太陽を反射して、明るく、青かった。波打ち際に近づいてみると、透明な水の下で小さな魚が泳いでいた。

懐かしい海に足をひたしていると、カメラを持った中年の夫婦が現れた。こんなところに観光客など、と行って見えていたら、夫婦が話しかけてきた。昔、親戚が住んでいて子供のころに一度だけ来たことがあるのだと、夫のほうが言った。どの家ですか、と少年だった男は聞いてみたが、夫の記憶は曖昧あいまいだった。記念写真を撮りたいからシャッターを押ししてほしい、と夫婦は言った。いいですよ、と少年だった男は愛想よくカメラを受け取った。眩しい浜辺に並ぶ夫婦にカメラを向け、ファインダーを覗くと、そこで少年が獲った魚を男と焼いて食べたことがありありと思ひ出された。おまえはすごいなと男に言われて、とてもうれしかったことを思い出した。